The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	柏木不在の論理 ： 柏木・弁少将の機能と夕霧・弁少将の対峙の構造
Author(s)	中井, 賢一
Citation	詞林. 2004, 35, p. 32-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67515
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

柏木不在の論理

――柏木・弁少将の機能と夕霧・弁少将の対峙の構造――

中井　賢一

はじめに

内大臣（頭中将）の「太郎」柏木と「二郎」弁少将は、「双子」の可能性すら想定しうる近い年齢[1]の同母兄弟である。二人の属性の類似が知られるが、それゆえ二人の相違、つまり人物造型の独自性が際立つとも言える。果たして二人の独自性はどこにあるのか。そして、それは物語の仕組みとしてどのような位相を占めるのか。光源氏そして「光源氏世界[2]」に対する働きかけのありかた、いわば「機能」の観点から、二人が「光源氏世界」の中心光源氏、そしてその後継者夕霧[3]と直接あるいはそれに準じる形で関わる場面を辿り読むことにする。

また、二人のうち早く賢木巻で物語に紹介されるのは弁少将で、柏木は初音巻まで明らかな形では物語上に姿を見せず、その理由は問われるべきであろう。弁少将のみが韻塞の負けわざに参加する賢木巻の叙述について、吉井美弥子氏は政治情勢から弁少将に「右大臣方からの密偵のごとき役割」を透視された[4]が、しかしなぜそれが弁少将であって柏木ではなかったのか疑問は残る。また、今井久代氏は「右大臣家の懐深く成長したのであれば、右大臣家に敵対する光源氏や左大臣家に即した韻塞ぎの負態の場面には、むしろ登場しなくて当然である[5]」との見解を提示されるが、澪標巻の例についても同様な説明が可能か。ここには弁少将以外に後の弘徽殿女御も紹介されるが、柏木が「右大臣家の懐深く成長」したがゆえに描かれないと言うのなら、弁少将と弘徽殿女御はそうでないがゆえに描かれるということになる。弁少将はともかく、右大臣は弘徽殿女御という女児には干渉せず柏木のみを掌中の玉としていたのか。六君朧月夜の入内を画策した摂関家にしては不自然ではないか。つまり、賢木巻のみならず澪標巻の叙述まで視野に入れた上で柏木が記されない意味を考えたとき、右大臣と光源氏の政治的対立や右大臣と柏木の親密さばかりがその原因とは断じにくいように思われる。

この物語には他にも、なぜか弁少将のみが表立って描かれ、柏木が描かれない、いわば柏木不在の場面が点在している。

例えば、印象的なものとして藤裏葉巻末の六条院行幸の場面が挙げられよう。弁少将の歌声についてのみ触れられ、柏木については同座の気配すら感じられない。なぜ柏木は不在なのか。あるいは不在のごとく描かれているのか。そこにはいかなる論理が見通せるのか。また、弁少将についても、「兄弟では最初に紹介されるのだから、『次郎』ではあるにしても、やがては物語において主要な働きをするものと、当然予想されてくる」[6]。果たして弁少将の「主要な働き」とはどのようなものか、併せ考えねばなるまい。

物語の場面展開の仕組みとして、柏木と弁少将の「機能」はどのように関わっているのか。二人の「機能」を定位しつつ、柏木の不在場面から窺える作中人物配置にかかる物語の論理について考察する。また、それらから示唆される、この物語の基本的構造についても再検討を試みる。

一　柏木の機能―柏木の第一機能―

柏木は恋に殉死する人物らしく玉鬘や女三宮への恋と関わって多く描かれ[7]、光源氏や夕霧との関わりにおいて描かれる場面は、別表下段「柏木」「2 6 7 8 9 10 12 13 18 19 20 21 22 27 28 30 33 34 36 45 46 47 48 49 53 54 55 56 57 58 66」（以下「柏（番号）」の形で示す）など三十一例である。ここでまず目立つのは、柏木が光源氏に高く評価されるという叙述、そしてその反映と思われる光源氏から何かを依頼されるという叙述の多さであろう。「6 7 10 12 27 28 30 33 49 53 54 55 57」などは光源氏に柏木の人物属性が高く評価される叙述[8]であり、また、「12 18 19 27 53 54 56」などは光源氏に何かを依頼される叙述と言え、重複するものを除くと計十六例、つまり五割以上がこれらに割かれていることになり、柏木の特徴と見て良いだろう。就中、柏木が光源氏に何かを依頼される時、柏木はそれに反応せねばならず、必然的に光源氏に対して働きかけることになり、その「機能」を考える上で注目に値する。次に「12 18 19 27 53 54 56」を全て挙げてみる。

柏12後掲「三　女三宮事件と弁少将」資料aに同じ

柏18内の大殿の頭中将（柏木）、弁の少将なども、見参ばかりにてまかづるをとゞめさせ給て、御琴どもを召す。宮（螢宮）の御前に琵琶、おとゞ（光源氏）に箏の御琴まいりて、頭中将和琴給て、はなやかに搔き立てたるほど、いとおもしろく聞こゆ。（中略）弁の少将、拍子取りて、梅枝出だしたるほど、いとおかし。童にて韻塞のおり、高砂うたひし君なり。（中略）御土器まいるに、宮、

「うぐひすの声にやいとゞあくがれん心しめつる花のあたりに

千代も経ぬべし」と聞こえ給へば、…（梅枝巻一五七頁）[9]

柏19高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、「このもの好みする若き人々心みん」とて、宰相の中将、式部卿の宮の兵衛督、内の大殿の頭の中将（柏木）など

に、「葦手、歌絵を、思〳〵に書け」との給へば、みな心〳〵にいどむべかめり。（梅枝巻一六二頁）

柏27 衛門督（柏木）のかたくいなぶるを責め給へば、げにいとおもしろく、（父太政大臣に）おさ〳〵をとるまじく弾く。何事も、上手の嗣といひながら、かくしもえ継がぬわざぞかし、と心にくゝあはれに人々おぼす。（中略）これ（柏木）は、いとわらゝかに上る音の、なつかしくあい行づきたるを、いとかうしもは聞こえざりしを、と親王たちもおどろき給。（若菜上巻二三七頁）

柏53 衛門督をば、何ざまの事にも、ゆへあるべきおりふしには、かならずことさらにまつはし給ひつゝ、のたまはせ合はせしを、…（若菜下巻三九八頁）

柏54 衛門督を、かゝる事のおりもまじらはせざらむは、いとはえなくさう〴〵しかるべきうちに、人あやしとかたぶきぬべきことなれば、まいり給べきよしありけるを、（柏木は）をもくわづらふよし申てまいらず。（若菜下巻三九九頁）

柏56 （光源氏）「（朱雀院の）御賀などいへば、こと〳〵しきやうなれど、家に生い出づる童べの数多くなりにけるを、御覧ぜさせむとて、まいなど習はしはじめし、その事をだに果たさんとて、拍子とゝのへむこと、又たれにかは、と思ひめぐらしかねてなむ、月ごろとぶらひものし給はぬうらみも捨ててける」と（中略）「かの大将（夕霧）ともろともに見入れて、舞の童べの用意心ばへよく加へ給へ。…」（若菜下巻四〇〇～四〇二頁）

まず「柏12」について、柏木と弁少将を夕霧と共に呼び寄せて演奏をさせる場面である。「ものの音聞き分く人」玉鬘に柏木の演奏を聞かせようという光源氏の意図は明らかである。次に「柏18」について、明石姫君の裳着の予祝といった場面性ゆえ、宴の場面である。明石姫君の裳着の予祝といった場面性ゆえ、祝賀ムードに花を添えるべく、光源氏は柏木の演奏を活用していると言える。次に「柏19」について、入内を控えた明石姫君の輿入れ道具として、光源氏が柏木らに草子を書かせる場面である。光源氏は、入内を華やかに演出するために柏木の才能に期待すると考えられる。続いて「柏27」について、光源氏四十賀で、太政大臣と柏木の演奏の相伝を聞き取るひと趣向が光源氏によって凝らされる場面である。点線部、柏木は、人々に「心にくゝあはれ」と思わせていて、光源氏の意向どおり賀宴の演出に一役買っていると言える。次に「柏53 54 56」について、朱雀院の五十賀のため、病に苦しむ柏木を光源氏が試楽に呼び出す場面である。光源氏は柏木を、「53」「ゆへあるべきおりふしには、かならずことさらにまつはし」ており、この賀宴に柏木を「54」「まじらはせざらむは、いとはえなくさう〴〵しかるべき」ことだと考えている。「人あやしとかたぶきぬべきこと」とあることから、光源氏主管の催しに柏木が参加しないと人々が不審に思う、つまり、

柏木が指揮していて当然というのだから、いかに光源氏が柏木に頼っていたかが窺える。「足が立たなくなってしまった柏木にしても、彼という存在がなくては「光源氏世界」は立ちゆかなくなっていることが、試楽の日の『拍子取り』を彼が任されていることによっても想像される」[10]と言われるとおり、まさに柏木は「光源氏世界」の体裁を整え、華やかに演出する存在としてあると言えよう。

このように見てくると、柏木は太政大臣方の人員でありながらも、実に多く光源氏に期待され、またその意向に添って貢献していることに気づかされる。光源氏以外にも、「柏2021 22」など、夕霧と雲居雁の結婚のため一役買うが、この結婚が「たはぶれにてもほかざまの心を思ひかゝるはあはれに、人やりならずおぼえ給ふ」（梅枝巻一六八頁）と考える夕霧の意向に適うものであることは疑いなく、夕霧にまでも貢献している。誤解を恐れず言うなら、柏木はむしろ光源氏方の人員のごとく造型されているのである。

例えば、それは柏木の思考のありかたからも看取される。鬚黒と結ばれた玉鬘が男児を出産した際、柏木は「宮仕ひにかひありて物し給はまし物をと、このはか君のうつくしきにつけても、（柏木）『いままで御子たちのおはせぬ嘆きを見たてまつるに、いかに面目あらまし』」（「柏17」真木柱巻一四四～一四五頁）と考える。冷泉帝の御子を望むこの思考は、言うまでもなく光源氏のそれと重なる。「六条院はおりゐたまひぬる冷泉院の御嗣おはしまさぬを、飽かず御心の内におぼす。」（若菜下巻三一九頁）とあった。日向一雅氏は、光源氏と柏木に見られる恋の設定の共通性から、柏木の死を「陰画としてありえた光源氏の破滅の物語」として、柏木を「もう一人の光源氏」と言われたが[11]、それは決して恋に関してのみではない。柏木は思考のレベルから、なぜか極めて光源氏に近接する人物像なのである。

さらに象徴的な事象がある。それは柏木が近江君を連れてくることである（「弁6」「柏9」）。言うまでもなく、内大臣家における近江君の存在は、光源氏方の玉鬘との対比において、光源氏の優位性を際立たせる徴表として捉えうる。つまり、近江君を内大臣方へ引き入れた柏木は、まさに光源氏方の優位を彩るために「機能」しており、そしてそれは同時に内大臣方の権威低下、つまり内大臣方を不利に導く働きをも果たしているとも言えるのである。この場面には更に注意すべき点があり、後に再度考察する。

一般的に、柏木と言えば、女三宮事件との関わりゆえに「光源氏世界」を侵犯するものとしてその存在性を把捉されがちであるが、果たしてそのような視角ばかりが有効か。確かに女三宮事件で柏木は光源氏の心を傷つけ、女三宮の出家に伴う光源氏評の下落までももたらした。しかし、この事件によって柏木は結果的に薫という人材を光源氏に、そして「光源氏世界」に与えもしている。「二品宮の若君（薫）は、

院の聞こえつけ給へりしまゝに、冷泉院の御門とりわきておぼしかしづき、后の宮も、御子たちなどおはせず、心ぼそうおぼさるゝまゝに、うれしき御後見にまめやかに頼みきこえ給へり。御元服なども、院にてせさせ給。」（匂宮巻二一五頁）とあり、薫が冷泉院や秋好から寵遇されていることが知られるが、就中、「御元服」を冷泉院が取り仕切ったこと、そして秋好が薫を「うれしき御後見」と見ていることに注意したい。つまり、薫にとって冷泉院はまさに親代わりであると宣言したようなもので、またそれは秋好が薫を頼ることによっても裏打ちされている。逆に言えば冷泉院と秋好の皇子代理が薫なのであり、光源氏があれほど欲していた冷泉院の後継を、遅まきながら柏木がもたらしたとも言え、必然的に光源氏方は以後も皇族との強固な繋がりが保証されることになる。また、「故致仕の大殿の女御ときこえし御腹に、女宮たゞ一所おはしけるをなむ、限りなくかしづき給御ありさまにおとらず、后の宮の御おぼえの年月にまさり給けはひにこそは、などかさしもと見るまでなん。」（匂宮巻二一六頁）とあり、冷泉院の薫への鍾愛ぶりは、弘徽殿女御との間の女一宮を傅くさまに「おとらず」にあるという。これは、冷泉院の鍾愛が女一宮に偏ることを防ぐ役割を薫が果たしていると言っても良く、その意味で冷泉院と弘徽殿女御との、ひいては太政大臣方との繋がりを光源氏方が牽制したことになる。つまり、薫は太政大臣方と皇族との繋がりを抑制し、光源氏方の不利を未然に防いでいるのである。光源氏にとって、最も高貴な女三宮との後継ぎをもたらし、皇族との関係によって次代の安泰を援護し、しかも、そのことで太政大臣方の優勢を事前に抑制しているのは、実は柏木であったのである。柏木を、即ち「『光源氏世界』の侵犯者」、と断定するのはいかがなものか。少なくともその「機能」に注視するとき、そういった一元的な捉え方には疑問を抱かざるを得ない。

内大臣方の人間でありながら内大臣方をむしろ不利な状況に導き、「光源氏世界」の体・裁維持に貢献するという意味において、「光源氏世界」を援護する「機能」を柏木は有すると言え、本稿においてはこれを柏木の「第一機能」と呼ぶことにする。

二　弁少将の機能—弁少将の第一機能—

次に弁少将の「機能」について考える。考察対象とする範囲は、柏木のそれとの比較のため、まずは柏木の死までとし、呼称は「弁少将」とする。弁少将が光源氏及び夕霧と関わる形で叙述される場面は、別表上段「弁少将」「1 2 4 5 6 9 10 13 14 15 16 18 19」（以下「弁（番号）」の形で示す）の十三例である。弁少将については、「1 2 4 9 13 14 15」など、唱歌と関わって七例描かれており、それが五割以上の割合であることからも推察されるとおり、歌謡、特に催馬楽に堪能であることがその特徴と見て良いだろう。光源氏は弁少将の歌声に

ついても高く評価してはいるが、[12]「弁1」「弁9」「弁13」「弁14」「弁15」など、光源氏の依頼による唱歌は一例もなく、ここに柏木との相違がある。なぜ柏木ほど光源氏に信頼されないのか。その催馬楽唱歌のありかたに注意すべきなのではないか。物語において、弁少将が男踏歌以外で謡う催馬楽で曲目が明らかになるのは、「高砂」、「梅枝」、「葦垣」であるが、それらの歌詞[13]を読み返したとき、次に挙げるそれぞれの場面性に相応しないように思われないか。

弁1夏の雨のどかに降りて、つれ〴〵なるころ、中将、さるべき集どもあまた持たせてまいり給へり。（中略）塞ぎもてゆくまゝに難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどのまどふ所〴〵を、（光源氏が）時〴〵うちの給さま、いとこよなき御才のほどなり。「いかでかうしも足らひ給ひけん、なをさるべきにて、よろづの事人にすぐれ給へるなりけり」とめできこゆ。つゐに右負けにけり。二日ばかりありて、中将負けわざし給へり。（中略）中将の御子の、ことしはじめて殿上する、八つ九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそび給。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかど〴〵しう、かたちもおかしくて、御遊びのすこし乱れゆく程に、**高砂**を出だしてうたふ、いとうつくし。（中略）

（三位中将歌）それもがとけさひらけたる初花におとらぬ君がにほひをぞ見る　（賢木巻三八四～三八五頁）

弁13前掲「一　柏木の機能」資料「柏18」に同じ（二重傍線部参照）

弁14（内大臣歌）紫にかことはかけむ藤の花まつよりすぎてうれたけれども

宰相（夕霧）、盃を持ちながら、けしきばかり拝したてまつり給へるさま、いとよしあり。

（夕霧歌）幾かへり露けき春をすぐしきて花のひもとくをりにあふらん

（中略）例の弁の少将、声いとなつかしくて、**葦垣**をうたふ。おとゞ（内大臣）、「いとけやけうも仕ふまつるかな」とうち乱れ給て、「としへにけるこのいゑの」とうち加へ給へる御声、いとおもしろし。

（藤裏葉巻一八一～一八二頁）

まず、「弁1」について、光源氏と三位中将（頭中将）が韻塞に興じ、光源氏の「いとこよなき御才」が賞揚されることになる。弁少将の「高砂」は、のちの「負けわざ」で謡われるのであるが、その歌詞は、『『白玉椿』のような女を得たと男が喜ぶが、後半ではその男をひやかして、それよりも魅力的な『百合花』『初花』のような娘を得そこなった、とする」[14]、つまり、焦って女を手に入れたもののそれ以上の女を手に入れられなくなったことへの揶揄を主旨とする。これを抽象し

て理解するならば、何かを手に入れたもののそれ以上のものを手に入れられない事態を揶揄するということになるが、果たして光源氏賞揚という場面性に相応しいと言えるか。この歌詞を韻塞の顕末に重ねるならば、「それ以上のもの」については不明ではあるものの、少なくとも「何かを手に入れた」というのは、光源氏がその「御才」ゆえに高い評価を「手に入れた」と見るしかなく、従ってこの「揶揄」は光源氏に向けられていることになってしまう。また、その後の三位中将の「それもがとけさひらけたる初花に」の語句は「高砂」の歌詞を踏まえており、二人の間であらかじめ打ち合わせ済みの予定調和と見ることもできなくはない。その場合、弁少将の揶揄は三位中将の意向に従ったものと考えねばなるまい。いくら「心ばへもかど〳〵しう」と言われるにしても「八つ九つばかり」の童の主体的行為とは考えにくい。弁少将は三位中将の意向に役立っていると言える。続いて「弁13」について、前にも見た明石姫君の裳着を翌日に控えた宴の場面である。弁少将は柏木ともども「裳着の儀に招待されたことのお礼言上」[15]に来て、「梅枝」を歌う。その歌詞は、「鶯が梅の枝に来て春だと鳴いているがまだ雪が降っている」というもので、時節には合致しているものの、この場面には不穏当の感は否めない。螢宮の歌「うぐひすの声にやいとゞあくがれん」に明らかなとおり、弁少将の歌は「うぐひすの声」に準えられ、従って弁少将も「うぐひす」と見なされており、弁少将が六条院にやってきて明石姫君裳着の寿ぎを高らかに歌い上げるというこの場面と「鶯が梅の枝に来て春だと鳴いている」という「梅枝」の前半が見事に符合することになる。しかし、その歌詞後半は「まだ雪が降っている」と続く。ということは、春であるはずなのに今なお冬の名残がある、と歌うことになり、ここ六条院が未だ春とは言えない、と言うに等しくないか。明石姫君の裳着を明日に控え、まさに六条院が春を謳歌しようとするその時、実はそれは真の春ではない、と歌ったとなると、弁少将の存在性は一転し、光源氏や明石姫君に対して皮肉を投げつけたことになる。あるいは、このような席上で歌を通じて寿ぐべき対象を揶揄することがあるのか、疑う向きもあろう。しかし、次の「弁14」が、そういった事象がありうる証左となる。夕霧の宿願どおり雲居雁との結婚が成る藤花宴の場面で、弁少将は「葦垣」を謡う。この歌詞の内容は言うまでもなく過去の夕霧を彷彿させるものであり、夕霧への揶揄と考えられよう。点線部、内大臣が歌詞をアレンジしつつ唱和することからすると、内大臣は事前に弁少将が「葦垣」を謡うことを知っていたのかもしれない。こじれたこの結婚問題について光源氏に膝を屈するのは内大臣にとって辛いはずで、つまり、弁少将の皮肉は内大臣の苦さの代弁とも考えられる。内大臣の指示の有無は定かではないものの、少なくとも内大臣の心情と重なった皮肉であったことは確認できよう。

以上、弁少将がいずれも場面性にそぐわない不穏当な催馬楽を謡う姿を描かれているという事実は看過すべきではない。「(催馬楽などの)歌謡は、宴会や饗応の場での奏楽や唱歌としてしばしば歌われるが、栄華や繁栄を寿ぎ祝うものが多く、場面を彩り物語を進展させる効果をもたらしている。[16]」と、催馬楽を謡うという行為が物語に果たす働きについて指摘されているが、殊、弁少将については「栄華や繁栄を寿ぎ祝う」行為からは逸脱していると言える。また、「弁1」「弁14」に窺えるように、それは父の意向にも添っており、光源氏や夕霧の優位に忸怩たる内大臣方の内実を代表するごとく吐露する働きを果たしているとも言える。つまり、弁少将とは、「光源氏世界」に対する内大臣方の敵愾心の代表あるいは象徴として、その存在があるのではないか。内大臣方の意向に添った形で「光源氏世界」に敵対する位相にスタンスを構える、いわば「光源氏世界」に反抗する「機能」が要請されてあると思われ、これを本稿では弁少将の「第一機能」と定位したいのであるが、内大臣方を不利に導き光源氏方に貢献する柏木のそれと実に対称的であることに注意したい。

ここで確認しておくことがある。弁少将の催馬楽が不適切であることに対する光源氏と夕霧の反応が大きく異なっているのである。「弁1」「弁13」とも、光源氏は弁少将を「いとうつくし」、「いとおかし」と評しており、全く気にも留めない体である。それに対して、「弁14」は、後に夕霧が雲居雁に「少将の進み出だしつる葦垣のおもむきは、耳とゞめたまひつや。いたきぬし哉な。かはくちの、とこそさしいらへまほしかりつれ」(藤裏葉巻一八三頁)とこぼすとおり、実に敏感にその歌意に反応し、不快の念を露わにしている。なぜ夕霧のみが弁少将に直ちに反応するのか。後に再度考える。

三　女三宮事件と弁少将—弁少将の第二機能—

弁少将が「光源氏世界」に果たす「機能」には、直接的に光源氏や夕霧らに関わるものだけでなく、間接的なものもあり注意を要する。それは柏木の恋と関わって見え隠れする。

a (「弁9」「柏12」)

①頭中将(柏木)、心づかひして出だし立てがたうす。「をそし」とあれば、弁少将、拍子うち出でて、忍びやかに歌ふ声、鈴虫にまがひたり。二返ばかり歌はせ給て、

②御琴は中将に譲らせ給つ。

b (「弁16」「柏30 31」)

①風吹かずかしこき日なりとけうじて、弁の君(弁少将)もえしづめずたちまじれば、

②おとゞ、「弁官もえおさめあへざめるを、上達部なりとも、若き衛府司たちはなどか乱れ給はざらむ。(中

③げにかの父おとゞの御つまをとにおさ〳〵劣らず、はなやかにおもしろし。

略）」などの給に、大将（夕霧）も督の君（柏木）もみな下り給て、えならぬ花の陰にさまよひ給ふ、夕映へいときよげなり。（中略）

③よきあしきけぢめあるをいどみつゝ、われもをとらじと思ひ顔なる中に、衛門督のかりそめにたちまじり給へる足もとに、並ぶ人なかりけり。かたちいときよげに、なまめきたるさましたる人の、用意いたくして、さすがに乱りがはしき、おかしく見ゆ。御階の間に当たれる桜の陰によりて、人々、花の上も忘れて心に入れたるを、おとゞも、宮も、隅の高欄に出でて御覧ず。（中略）（夕霧は）御階の中のしなの程にゐ給ぬ。督の君つゞきて、「花乱りがはしく散るめりや。桜は避

④「御簾のうちに、ものの音聞き分く人ものし給らんかし。こよひは盃など心しても。盛り過ぎたる人は、酔ひ泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」とのたまへば、姫君（玉鬘）も、げにあはれと聞きたまふ。

（篝火巻三一～三二頁）

きてこそ」などの給つゝ、

④宮（女三宮）の御前の方をしり目に見れば、例の、ことにおさまらぬけはひどもして、色〳〵こぼれ出でたる御簾のつま、透影など、春の手向けの幣袋にやとおぼゆ。

（若菜上巻二九四～二九六頁）

aは柏木が光源氏に促されて玉鬘の近くで和琴を弾いてみせる場面で、bは蹴鞠の場面である。aとbの展開のありかたが不思議と一致していることに気づく。片や音楽、片や蹴鞠ではあるが、いずれも時系列に添って見ていくと次のような展開になっている。なお、引用本文に付した番号と対応しているので比較されたい。

①柏木よりもまず弁少将が積極的に参加する。

②光源氏が柏木の参加を促す。

③光源氏視点で、柏木の技量が高く評価される。

④すぐ近くの御簾の内に柏木が恋する女君が控えている。

柏木はa以外にも玉鬘への恋を描かれはするが、実際に玉鬘の近くでの反応が描かれるのはこのaのみである。bにつ

いても同様で、ここ以外に柏木が女三宮に近く関わるところと言えば、もう若菜下巻の密通場面になってしまう。今、注意したいのはaｂに共通する弁少将の働きである。aでは、玉鬘を意識して歌おうとしない柏木に、助け船を出す形で弁少将が歌い出し、そのことによって柏木が和琴の演奏を光源氏に勧められ、結果、玉鬘に和琴の演奏を聴かせることになり、bでは、柏木を尻目に、積極的に蹴鞠にまじり、そのことによって光源氏の「弁官もえおさめあへざめるを、…」との指示が出て、柏木も蹴鞠に興じ、結果、女三宮を垣間見る。弁少将が先陣を切り、光源氏の指示が拍車をかけ、柏木の参加が成立し、柏木の恋が進行する、という一連の展開が共通しており、弁少将は、柏木が六条院の女性との恋に踏み込んでいく契機として関与していると言えるのである。

他にも類似の場面として「弁18」「柏45」が指摘できる。

衛門督、きのふ暮らしがたかりしを思ひて、けふは御おとうとども、左大弁（弁少将）、藤宰相など、奥の方に乗せて見給けり。かく（紫上死去と）言ひあへるを聞くにも胸うちつぶれて、「何かうき世に久しかるべき」と、うち誦じひとりごちて、かの院（二条院）へみなまいり給。

（若菜下巻三七三～三七四頁）

女三宮と逢瀬を持った柏木が、賀茂祭に弁少将らとともに出かける途中で紫上死去の噂を聞き、二条院に行く場面である。「奥の方に乗せて」とあり、柏木から誘ったことが分かるが、もし、弁少将らが同乗していなければ、前日同様、病気を口実に二条院には参上しないということも可能だったろう。しかし、祭見物には柏木から誘う形で外出しているのに、紫上の弔問には立ち寄らないとなると、さすがに弁少将らの手前、不自然である。つまり、弁少将の存在が、柏木を光源氏に引き合わせる力源として関与しているとも言える。柏木が光源氏への恐れゆえに命を消耗させたのは疑いないが、そうあってみれば、弁少将は、柏木を恋を手掛かりに光源氏と関わらせ、結果、柏木を物語世界から抹消するよう「機能」していることになるのではないか。この働きを弁少将の「第二機能」と定位したいのであるが、「光源氏世界」の援護的「機能」を有していた柏木を、そこから抹消する方向で立ち働く弁少将は、その意味でも「光源氏世界」への反抗的「機能」を果たしていると言える。つまり「第一機能」と同一線上に「第二機能」が位置付けられているのである。女三宮事件の張本人は柏木である。しかし、その柏木の動きを導き、結果その消去の力源として関与しているのが弁少将であることを見逃してはならない。

ただし、柏木の「機能」は、死に臨むその時まで一貫していると思われる。それはなぜか。注意すべきは、若菜上巻から突如柏木と皇族との繋がりを示唆する叙述が現れるようになることである。父太政大臣は四君と朧月夜を通じて朱雀院に柏木と女三宮の婚姻を申し入れ（「柏25」若菜上巻二二〇～

二二一頁)、その太政大臣は朱雀院に「むかしより背き申給は」ずにいるとされる(同巻二二四頁)。柏木その人も「(朱雀)院に常にまいり、親しくさぶらひ馴れ給し人」(「柏29」同巻二九二頁)で、「朱雀院のとりわきておぼし使はせ給しかば、御山住みにをくれきこえては、又この宮(後の今上帝)にも親しうまいり、心寄せきこえたり」(「柏37」若菜下巻三一三頁)、あるいは「いまの御世(今上帝)にはいと親しくおぼされて、いと時の人也」(「柏42」同巻三五七~三五八頁)などと、今上帝との強い繋がりも強調されている。物語の展開としては、この「いと時の人也」の叙述の直後に小侍従の手引きによって柏木と女三宮の密通が成るのであるが、注目すべきは、密通後はこのような皇族との繋がりを言う叙述が、今上帝が音楽と関わって柏木を追慕するという場面「柏74」(柏木巻四二頁)、「柏83」(鈴虫巻七八頁)以外は消えてしまうことである。女三宮事件のためにこの繋がりが敢えて強調されているとも読めなくはない。もちろん、柏木が女三宮への恋心を募らせる契機として特に朱雀院との繋がりがあったことは疑いなかろう。しかし、私が注意したいのは、柏木がこの女三宮事件で死んでしまうという点、つまり、この三者の繋がりが切れてしまうという点なのである。この繋がりは柏木自身を「時の人」に押し上げるだけでなく、太政大臣方の将来にも十分活用されるべき関係であったろう。それが柏木の死によって霧消するのであってみれば、太政大臣方としては次の手を考えねばならない。当面、太政大臣方が急激に勢力を拡大する可能性はなくなり、それは、同時に「光源氏世界」の当分の安泰をも意味する。つまり、柏木の死を前提として三者の緊密な繋がりが叙述されており、そして柏木は死によって自らの「機能」を太政大臣方を不利な状況に導く形で完遂した、とも読めるのである。逆に言うなら、それほど徹底した援護的「機能」を果たしてくれる人材を光源氏や夕霧は弁少将の「第二機能」によって失わねばならないのであった。

四　柏木不在の論理

二人の「機能」が物語場面の展開にどのような影響を与えるのか、柏木の不在場面を取り上げ考える。不在とは二つの意味があり、もちろん一つは柏木の死後で、その「機能」は消滅していると考えられ、もうひとつは生前「機能」が健在であるときにいない、あるいはいないかのごとく描かれている場合で、特に後者に注目する。まずは前に触れた柏木が近江君を連れてきたことが光源氏に伝えられる場面(「弁6」「柏9」)を引用しよう。

(光源氏)「いかで聞きしことぞや。おとゞの、ほか腹のむすめ尋ね出でて、かしづき給ふなる、とまねぶ人ありしかば。まことにや」と弁少将に問い給へば、「ことゝしく、さまで言ひなすべきことにも侍らざりけるを。

この春のころをひ、夢語りしたまひけるを、ほの聞き伝へ侍ける女の、われなむかこつべきことある、と名のり出で侍けるを、中将の朝臣（柏木）なむ聞きつけて、まことにさやうにふればいぬべきしるしやある、と尋ねとぶらひ侍ける。くはしきさまはえ知り侍らず。（中略）」と聞こゆ。（光源氏は）まことなりけりとおぼして、「いと多かめるつらに離れたらむ、をくるゝ雁を、しゐて尋ね給ふがふくつけきぞ。いとともしきに、さやうならむもののくさはひ、見いでまほしけれど、名のりもものうききはとや思ふらん、さらにこそ聞こえね。さても、もて離れたることにはあらじ。らうがはしく、とかく紛れ給ふめりしほどに、底清く澄まぬ水に宿る月は、曇りなきやうのいかでかあらむ」とほゝ笑みての給ふ。中将の君（夕霧）もくはしく聞き給ふことなれば、えしもまめだたず。少将（弁少将）と藤侍従とはいとからし、と思ひたり。

（常夏巻五～六頁）

弁少将が光源氏に近江君の存在を明かすのであるが、その近江君を連れてきた張本人の柏木が同座していない。光源氏は「くはしきさまはえ知り侍らず」にいる弁少将などではなく、柏木本人にその経緯を問いただしても良いところではあるまいか。なにゆえ柏木は不在なのか。弁少将の告白を聞いた光源氏の反応に注目したい。点線を付した所、露骨に内大臣方に皮肉を言っている。夕霧までもが「えしもまめだたず」に嘲笑の体である。「少将と藤侍従とはいとからし、と思ひたり」とあることからも、その悪意の強烈さが窺える。つまり、ここは光源氏が内大臣方を強烈に攻撃する場面としてあるのである。そうあってみれば、なぜここに柏木が不在なのか、なぜ弁少将らが光源氏の攻撃を受けなければならないのか、その意味が見えてきはしないか。つまり、物語は光源氏と夕霧に柏木を攻撃させることを敢えて避けようとしているのではないか。そして、それは柏木が「光源氏世界」の援護的「機能」を担っているからではないか。それゆえ、物語はこの場面を柏木不在にするのではないか。思えば、光源氏は柏木と女三宮の密通を柏木の手紙によって知った時も、これほどの重大事件であるにもかかわらず、柏木その人への批判を全く言わない。「いとかくさやかには書くべしや、あたら人の文をこそ思ひやりなく書きけれ」（若菜下巻三八四頁）と、文の書き方の思慮不足は指摘するものの、女三宮と通じた事への非難はない。むしろ多くは、女三宮への批判となっている。光源氏が柏木を批判する心性にないことは「恋の山路は、えもどくまじき御心まじりける」（同巻三八六頁）との感慨からも裏付けられる。この不可解さも、この物語が柏木の「機能」を重視するがゆえと考えると腑に落ちる。つまり、柏木の「機能」はかくも「光源氏世界」の、ひいては物語の、場面展開に影響を与えるものだったのである。

前に、幼少期の柏木が不在である理由について、柏木と右

大臣家との親密さや光源氏と右大臣の政治的対立から解釈される吉井氏や今井氏の御見解を引用したのであるが、それらについても柏木の「機能」という観点から読み解けないか、次に他の柏木不在の場面と併せて考察しよう。太政大臣方の長子なのであるから、まず柏木について言及されてしかるべきなのに、なぜか弁少将についてのみ描かれる場面、それは前に触れた「弁1」「弁2」「弁15」である。便宜上、ＡＢＣの記号を付す。

Ａ（「弁1」）前掲「二　弁少将の機能」資料1に同じ

Ｂ　世の中すさまじきにより、（左大臣は）かつは籠りゐ給ひしを、とり返しはなやぎ給へば、御子どもなども沈むやうにものし給へるを、みなうかび給。とりわきて宰相中将（頭中将）、権中納言になり給。かの四の君の御腹の姫君十二になり給ふを、内にまいらせむとかしづき給ふ。かの高砂うたひし君もかうぶりせさせて、いと思ふさまなり。腹〻に御子どもいとあまた次〻に生ひ出でつゝ、にぎわゝしげなるを、源氏のおとゞはうらやみ給。

（「弁2」澪標巻九九頁）

Ｃ　神無月の廿日あまりのほどに、六条院に行幸あり。紅葉の盛りにて、けふあるべきたびの行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、院さへ渡りおはしますべければ、世にめづらしく有難きことにて、世人も心をおどろかす。（中略）（冷泉帝の）御かたちいよ〻ねびとゝのほり給て、（光源氏と）たゞ一つ物と見えさせ給を、中納言（夕霧）さぶらひ給が、こと〻ならぬこそめざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしにをとりまさらん、あざやかにほはしき所は添ひてさへ見ゆ。ふへ仕うまつり給、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶらふなかに、弁の少将の声すぐれたり。

（「弁15」藤裏葉巻一九五～一九八頁）

まずＡについて、前にも見たとおり、弁少将の揶揄は一人勝ちする光源氏の「いとこよなき御才」に向けられていると思われ、したがって、ここは光源氏の卓越した才能の言挙げという場面性を読み取って良いだろう。これと類似するのがＣである。明石姫君の入内、夕霧の結婚、自らの准太政天皇昇任と、立て続けに「光源氏世界」の栄華に関わる出来事があり、冷泉帝からは朝覲行幸を受ける。光源氏の強大な権力体制は、自身の冷泉帝と「一つ物」の美しさと相俟って、殊に際立っていると言える。

柏木は、「光源氏世界」の援護的「機能」を担い、それは同時に太政大臣方を不利に導くのであった。光源氏は、Ａでは三位中将、Ｃでは太政大臣に際立って優勢にあるとされるのだから、作り手にしてみればその場に敢えてそのような「機能」の人物を同座させる必要などない。光源氏が絶対的優位にある場面で、光源氏方を擁護する必要性も太政大臣方を不利に導く必然性もなく、したがって柏木の「機能」は相

応せず、それゆえ柏木が不在となる、と考えられるのではないか。また、光源氏方の絶対的優位ゆえに、同座するのはそれに「反抗」すべき「機能」を担う弁少将でなければならないということなのではないか。

Bについても確認しておく。ここは光源氏と弁少将に直接的な交渉があるわけではないので、ACと同列には見なせないが、権中納言方の情報に光源氏が敏感に反応しているのであるから、全く影響関係がないとも言い切れまい。この場面、太政大臣の復帰で「とりわきて宰相中将、権中納言になり給」とあり、また、光源氏は権中納言方が「腹〻〳〵に御子どもいとあまた次〳〵に生ひ出でつゝ、にぎわゝしげなる」状況であるのを「うらやみ給」ともある。ACとは逆に、権大納言方が優位にあるかのごとく読める。にもかかわらず、この場面で柏木に言及されないのはなぜか。この場面の前後の叙述に注意したい。まず、ここの直後、「まことや、かの明石に心ぐるしげなりし事はいかにと、おぼし忘るゝ時なければ、（中略）人知れずあはれにて、御使ありけり。とく帰りまいりて、『十六日になむ、女にてたいらかにものし給ふ』と告げきこゆ」（澪標巻一〇〇頁）と明石姫君の誕生が語られる。言うまでもなく、後の中宮であり、国母として「光源氏世界」の栄華の鍵となる人物である。権大納言方の子どもの数を「うらやみ給」光源氏であったが、量より質、とも言いつべく、自家の権勢に果たす子どもの力においても、一転、光源氏方が優位に立つさまが描かれるのであった。「まことや」という語り出しで語られることも、森一郎氏が「作者は『まことや』と語りはじめることによって、それまでと比しては、軽い話であるかのように思わせて、読者をさりげなく誘いこみ、実は重要な話題に引きこむ『語り』のテクニックを用いている」と言われるとおり、いかにも「重要な」明石姫君の存在を別格として扱う筆致であるように思われる。また、直前には「源氏の大納言、内大臣になり給ひぬ。数定まりてくつろぐ所もなかりければ、加はり給也けり」（澪標巻九八頁）と、内大臣への昇任記事もある。確かに宰相中将から権中納言への昇進は正四位下から従三位への二階級特進であり、喜ぶべきものであろうが、内大臣という、太政官の中枢へと駒を進めた光源氏とは格差があり、やはりその優位性においては光源氏に敵わないと言わざるを得ない。その意味で、ここもACと共通の場面性を有すると言えよう。

五　柏木の第二機能と藤裏葉巻末の位相

柏木の在・不在という物語場面の人員配置を決定する論理に、柏木と弁少将の対称的な「機能」が関与しており、この物語においてその「機能」は実に重要な位置を占めているということを述べてきたのであるが、そうあってみれば、弁少将の「第二機能」もそれを対称的な柏木の「第二機能」によって裏打ちされていると想像されないか。弁少将がその

「第二機能」ゆえに柏木を「光源氏世界」からの消滅へと向かわせるのならば、対称的な柏木のそれは弁少将を「光源氏世界」との関わりの直中に導くと仮定される。このように考えたとき、実に興味深い事実に気づかされるのである。

①十五夜の夕暮に、（中略）こよひは例の御遊びにやあらむとおしはかりて、兵部卿の宮はたり給へり。大将の君（夕霧）、殿上人のさるべきなど具してまいり給へれば、こなたにおはしますと、御琴の音を尋ねてやがてまいり給。（中略）内の御前にこよひは月の宴あるべかりつるを、とまりてさう〳〵しかりつるに、この院に人〳〵まいり給と聞き伝へて、これかれ上達部などもまいり給へり。虫の音の定めをし給ふ。（中略）御かはらけ二はたりばかりまいるほどに、冷泉院より御消息あり。御前の御遊びにはかにとまりぬるをくちおしがりて、左大弁（弁少将）、式部大輔、又人〳〵引きゐて、さるべきかぎりまいりたれば、大将などは六条の院にさぶらひ給ふと聞こしめしてなりけり。（「弁30」鈴虫巻七五～七八頁）

②きさらぎの二十日のほどに、兵部卿の宮（匂宮）、初瀬にまうで給。（中略）上達部いとあまた仕うまつり給。殿上人などはさらにもいはず、世に残る人少なう仕うまつれり。（椎本巻三四〇頁）

③（匂宮の初瀬詣での）御迎へに、藤大納言（弁少将）仰せ言にてまいり給へり。（「弁46」椎本巻三四四～三四五頁）

①について、六条院の「十五夜」の宴に兵部卿宮や夕霧、「上達部など」が参上しているところへ、冷泉院から光源氏に参上するよう誘いが来る、という場面である。「上達部など」は宮中の「月の宴」が中止になると即座に六条院に顔を出すのであるが、「冷泉院より御消息あり。御前の御遊びにはかにとまりぬるをくちおしがりて、左大弁（弁少将）、式部大輔、又人〳〵引きゐて、さるべきかぎりまいりたれば、大将などは六条の院にさぶらひ給ふと聞こしめしてなりけり」とあり、弁少将はまず冷泉院に参上しており、しかも、冷泉院が、夕霧らが六条院にいると「聞こしめし」たのは、当然この弁少将らの報告によると思われるので、弁少将は六条院でも宴があることを承知の上だった、ということになり、弁少将が、光源氏ではなく冷泉院との繋がりを最優先していたことが分かる。②③は、匂宮が初瀬詣での帰りに宇治に中宿りをし、それを都から弁少将が迎えに参上する、という記述である。③に「仰せ言にてまいり給へり」とあって、今上帝から弁少将への勅命であったことが分かるが、②には「上達部いとあまた仕うまつり給。殿上人などはさらにもいはず、世に残る人少なう仕うまつれり」とあり、「世に残る人少な」いほど「上達部」が匂宮の初瀬詣でに伺候していたことを思い合わせると、この期間中、弁少将が今上帝に親しく近侍していたことが想像できる。

前に述べたとおり、若菜上巻以降、柏木と今上帝など皇族

とのパイプが頻繁に描かれ出した。つまり、ここは弁少将が柏木の代役を果たしていると見るべきではないのか。このような弁少将のありかたは、太政大臣方にとっては、当然ながら柏木の死によって必然化したもので、柏木が健在ならそのような必要もなかったはずである。つまり、柏木の死が、弁少将の政治手腕を表面化させたと言って良いのである。

確かに弁少将は匂宮三帖では政治的な姿が強調されてくる。紅梅巻では、夕霧の大君に対抗する形で自らの大君を春宮に入内させる姿が描かれている[18]し、また中君については匂宮と結婚させようともしている[19]。あるいは、竹河巻では「(玉鬘大君の参院に)大納言殿(弁少将)よりも、人々の御車たてまつれ給。北の方は古おとゞの御むすめ、真木柱の姫君なれば、いづ方につけてもむつましう聞こえ通ひ給べけれど、さしもあらず。(中略)(玉鬘は)殿のをはせましかばと、よろづにつけてあはれなり」(「弁41」竹河巻二七四頁)とあるとおり、玉鬘の大君の参院に「御車」は出すものの、「むつましう聞こえ通ひ給」べき玉鬘との繋がりが逆に薄い弁少将の姿が描かれている。玉鬘が「殿のをはせましかば」と考えている点に注意したい。鬚黒が存命ならば弁少将はそのような態度ではなかったろう、ということは、弁少将は鬚黒在世中は玉鬘邸の人々とも親密だったということを示しているのであり、鬚黒の死後に、踵を返すごとく玉鬘との繋がりを切り捨てたとおぼしい。また、同じく竹河巻で弁少将は「左大臣亡せ給て、右は左に、藤大納言(弁少将)、左大将かけ給へる右大臣になり給」(「弁42」竹河巻二八八頁)と、夕霧と左右大臣に同時昇進している。藤裏葉巻末時点で夕霧が中納言で既に従三位だったことを思うと、この同時昇進というのはまさに弁少将が夕霧を追い詰めたと言わざるを得ない。つまり、弁少将は、柏木の死後、夕霧を追い詰めるほどの政治性を発動するのであり、夕霧との政治的競合を必然化されるのである。繰り返すが、柏木が健在であったならばこれほどまで政治に偏った人物像である必要はなかったかもしれない。つまり、弁少将の政治的人物像は柏木の死を前提としたものとも言えるのである。このような弁少将の人物像を発動し表面化させた上で「光源氏世界」と関わらせること、これこそが柏木の「第二機能」なのであり、そのためにも柏木は死なねばならなかった。つまり、柏木は弁少将のための狂言回しとしての役割も担っていたのであった。柏木の「第二機能」は、弁少将を「光源氏世界」の直中へと導き、その意味で弁少将のそれとは確かに対称的であると言える。しかし、弁少将の政治性を表面化させ夕霧との競合を導いたことは、同時に「光源氏世界」への「反抗」のために関与しているとも言える。弁少将のふたつの「機能」が、一貫して反抗的であったことと比較すると、柏木のふたつの「機能」は生前の援護的なそれ、死後の反抗的なそれ、と変容しており、二人の「機能」は大枠としては対称的ではありながらも、厳密には単純な二項対

立ではないと言えよう。

柏木はその死によって「光源氏世界」の援護的「機能」を絶っただけでなく、弁少将の「光源氏世界」への反抗的「機能」を特に夕霧への政治的対立として収斂させた。つまり、光源氏に対しては援護的「機能」ゆえであった柏木の不在は、夕霧に対しては、全く逆に、それが働かないがゆえの不在、と読み分けねばならない。そうあってみれば、柏木不在の最大の被害者は、実は夕霧だったのではないか。柏木は夕霧に弁少将の敵対的「機能」のみを突きつけて物語世界から消えるのである。つまり、この物語における対立の構図は夕霧と弁少将にこそ仕組まれ構造化されているのではないか。

「弁2」（澪標巻九九頁）では、前に見たとおり、権中納言（頭中将）の男児として弁少将が「かの高砂うたひし君もかうぶりせさせて」と紹介されるばかりで、柏木はその存在を明示されてはいなかった。この記事の直後に「大殿腹の若君（夕霧）、人よりことにうつくしうて、内、東宮の殿上したまふ」（同巻同頁）とあり、権中納言方、光源氏方、それぞれ唯一紹介される男児が、片や「かうぶり」したこと、片や「東宮の殿上」つまり東宮の殿上童として活躍していることが記される。これは、既にこの段階から弁少将と夕霧とが一対としてあることの徴表なのではないか。前に、弁少将の揶揄に夕霧のみが敏感に反応することについて指摘した。なぜ夕霧のみが弁少将の揶揄を正面から受け止めるように描かれているのか。そのことも同様に解釈すれば良いのではないか。「機能」に注目したとき、一貫して夕霧と弁少将にこそ対峙の構図が透視され、また、柏木の死は、その構図を明確な政治的対立のそれとして浮かび上がらせるべく、これも早くから必然化されていたのである。

このように考えた上で、再度藤裏葉巻末を読んでみたい。光源氏の栄華が賞揚されるはずの、准太政天皇昇任のあたりから読み返してみると、実に奇妙なことに気づかされるのである。資料の**オカ**は「四　柏木不在の論理」資料**C**と重なるが敢えて再度引用する。

ア その秋、太政天皇になずらふ御位え給ふて、御封加はり、つかさ、かうぶりなどみな添ひ給。かゝらでも世の御心にかなはぬことなけれど、なをめづらしかりけるむかしの例を改めて、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなり添ひ給へば、内にまいり給べき事かたかるべきをぞ、かつはおぼしける。かくても、なを飽かずみかどはおぼして、世の中を憚りて、位をえ譲りきこえぬことをなむ、朝夕の御歎きぐさなりける。内大臣あがり給て、宰相の中将、中納言になり給ぬ。御よろこびに出で給。

（藤裏葉巻一九二～一九三頁）

イ（夕霧と雲居雁とは）あらまほしくうつくしげなる御あはひなれど、女は、またかゝるかたちのたぐひもなどかなからんと見え給へり。おとこは、際もなくきよらにをは

す。（中略）（太政大臣）「この水の心尋ねまほしけれど、翁は言忘して」との給ふ。

そのかみの老い木はむべも朽ちぬらむうへし小松も苔生ひにけり

おとこ君の御宰相の乳母、つらかりし御心も忘れねば、したり顔に、

いづれをも陰とぞ頼む二葉より根ざしかはせる松のすゑ〳〵

老い人どもも、かやうの筋に聞こえ集めたるを、中納言（夕霧）はおかしとおぼす。女君はあいなく面赤み苦しと聞き給ふ。（藤裏葉巻一九五頁）

ウ おとゞ（太政大臣）、そのおりはおなじ舞に立ち並びきこえ給ひしを、われも人にはすぐれたまへる身ながら、なをこの際はこよなかりけるほどおぼし知らる。しぐれ、おり知り顔なり。

「むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る

時こそありけれ」と聞え給ふ。（藤裏葉巻一九七頁）

エ 物のけう切なるほどに、御前にみな御琴どもまいれり。宇多の法師の変はらぬ声も、朱雀院は、いとめづらしくあはれに聞こしめす。

秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝる紅葉のをりをこそ見ね

うらめしげにぞおぼしたるや。みかど（冷泉帝）、

世の常の紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を

と聞こえ知らせ給ふ。（藤裏葉巻一九八頁）

オ （冷泉帝は）御かたちいよ〳〵ねびとゝのほり給て、たゞ一つ物と見えさせ給を、中納言（夕霧）さぶらひ給が、こと〳〵ならぬこそめざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしにをとりまさらん、あざやかにほはしき所は添ひてさへ見ゆ。ふへ仕うまつり給、いとおもしろし。（藤裏葉巻一九八頁）

カ 唱歌の殿上人、御階にさぶらふなかに、弁の少将の声すぐれたり。（藤裏葉巻一九八頁）

まず**ア**について、光源氏は准太政天皇への昇進を手放しで喜ぶどころか「内にまいり給べき事かたかるべき」事態に不満を露わにし、また冷泉帝は冷泉帝で「位をえ譲りきこえぬこと」を「朝夕の御歎きぐさ」にしているという。続いて**イ**の叙述の中ほど、太政大臣の歌があるが、夕霧と雲居雁を祝福する体ではあるものの、その内容としては『細流抄』が「わかき人たちの成人して吾身は老木となれると也」と注し、また「翁」と自称することからも分かるように、世代交替と自らの老いとを重ね合わせるものである。**ウ**は、六条院行幸の際の太政大臣の思いと光源氏賞揚の歌であるが、光源氏に敵わなかった自らの器を「おぼし知らる」と自覚するのだか

ら、明らかに太政大臣の敗北宣言である。**エ**は、朱雀院の、自分の在世中と今の光源氏のありようとを比較した不満と、それを慰めるべく詠まれた冷泉帝の歌が詠まれる場面である。しかし、その冷泉帝の「世の常」歌も、朱雀院の春宮時代、つまり桐壺帝の治世にこのようなことがあったではないか、という内容なのであり、果たして慰めになっているのか疑わしい。桐壺帝を持ち出さねばならないこと自体、実に消極的で、朱雀院に諦めを強いる行為と言わねばならないのではないか。そういえば、冷泉帝自身も少女巻の朱雀院行幸の際、「鶯のむかしを恋ひてさえづるは木伝ふ花の色やあせたる」（少女巻三一九頁）と詠んでおり、「わが治世が桐壺帝の御代に劣っているからだろうか、の意」と注されるように、[26] 桐壺帝に大きなコンプレックスを持っていたとおぼしい。だからこそ朱雀院の不満に敏感に反応したのであろうと思われる。

つまり、ここまで見たとおり、光源氏も、冷泉帝も、太政大臣も、朱雀院も、誰一人として満たされた心でこの藤裏葉巻末を迎えてはいないのである。

ただし、ただ一人夕霧を除いて、である。

アの最後、ついに「中納言」に昇進し、「御よろこび」の挨拶でかつて「六位宿世」と見下げられた溜飲を下げる。**イ**の冒頭、雲居雁にはふさわしくないとまで夕霧の素晴らしさが絶賛される。また、太政大臣の「老い木」歌と、続く「老い人ども」の歌に、雲居雁でさえ「面赤み苦し」く思うのに、夕霧は「おかしとおぼす」という。特に「老い人ども」の歌は、「二葉より根ざしかはせる」とあり、二人の幼な恋を冷やかす内容であって、だからこそ雲居雁は顔を赤らめるのであろうが、ひとり夕霧のみ気にも留めず結婚成立に悦に入っている姿が描かれ、またそのような夕霧は絶賛される対象としてある。**オ**に至っては、このあたりの描写の中で夕霧が最も分量を割き詳説されていることが分かる。冷泉帝と「こと〳〵ならぬ」顔立ち、「あざやかにほはしき」さまの「けはひ」、「いとおもしろ」い「ふへ」の才能、と、最も多く賞揚されているのは実は夕霧なのである。

この藤裏葉巻末に、光源氏の政治的絶頂を見通すことに疑義を呈するものでは決してない。しかし、描かれている事象ではなく、どう描かれているかという、表現のレベルから見えてくるのは、ひとり満ち足りた夕霧の姿であり、またそのような夕霧こそを賞揚するこの藤裏葉巻末の位相なのである。藤裏葉の大団円は、光源氏後継者として意気揚々たる夕霧のためにしつらえられたものと読むべきではないのか。

このように、藤裏葉巻の真の主役が夕霧であると考えたとき、**カ**の叙述において、弁少将のみが登場していること、そしてこの場面に柏木が不在であることの意味は極めて大きいと言わねばならない。物語は、賞揚される夕霧の目前に弁少将のみを配置しているのだ。物語は、この後の夕霧と弁少将の対峙を、そして、そこには夕霧に柏木の援護的「機能」が

働かないことを、大団円の裏で暗示しているのである。ひとり満ち足りた夕霧と、それを見据える弁少将という政敵、そしてその対峙に潜む夕霧の厳しさ、これらを抱え込んだ叙述として藤裏葉巻末を捉え直すべきではなかろうか。藤裏葉巻末で夕霧が冷泉帝と共に賞揚される意味について、姥澤隆司氏は「光源氏の次の世代の時代の幕開け」と見るべきとされたが[21]、この「幕開け」が希望的観測を決して許さない未来を包摂したものであることを忘れてはならないであろう。

夕霧に、弁少将が政治的対立者として関わってくること、そしてその時既に「光源氏世界」を援護していた柏木はいないこと、それゆえ夕霧と弁少将の対峙において夕霧が不利にならざるを得ないこと。夕霧の厳しさ、そして「光源氏世界」の限界。これらを内在させ、物語は藤裏葉巻末に柏木を配置せず、その不在を描くのであろう。この場面について、吉井美弥子氏は、「弁少将の『美声』は、栄華を極めた光源氏のゆくえに潜む影を示唆しているようだ[22]」と言われたが、「光源氏のゆくえに潜む影」とは、むしろ夕霧のゆくえに潜む影なのであり、夕霧にこそこの「影」の問題が収束すると言えるであろう。無論、今述べた弁少将に追い詰められる「夕霧の厳しさ」には、弁少将の関与だけとは思えない事象もある。例えば、鬚黒の死などは弁少将とは全く因果関係がない。鬚黒が実質上光源氏の婿であり、光源氏方にとって政治上有利に働く存在であったことは早く森一郎氏によって明らかにされるところであるが[23]、そのような「光源氏世界」にとっての有利な駒を失わざるを得ないところに「光源氏世界」の援護的「機能」の消失を思わねばなるまい。

おわりに

光源氏や夕霧に対する柏木と弁少将の関わり方、働きかけのありかたは、それぞれ対称的な「第一機能」、あるいは、二人の関わりから新たに紡ぎ出されてくる「第二機能」を浮き彫りにする。この物語が、いかにそれらの「機能」を緻密に描き分けているか、そして、いかにその場面性と「機能」との整合性が重視されているか、人物配置の方法の検証を通じてその論理の一端が明らかになったことと思う。

「光源氏世界」に対する柏木の援護的「機能」、そして弁少将の反抗的「機能」、つまり二人の「第一機能」は、それらと表裏する太政大臣方への貢献の有無とも相俟って、それぞれの場面における二人の在・不在を必然化し、また、二人の「第二機能」は、女三宮事件、そして柏木の死、という、物語の大きな展開に寄与することを通して「光源氏世界」を擁護する「機能」を解体に導いた上で、夕霧と弁少将の厳しい政治的対立の構図を浮上させる。しかし、この夕霧と弁少将との対峙というのは、それぞれの「第二機能」、つまり、「光源氏世界」への反抗の肥大化の結果として初めて発生するという性格のものでは決してない。むしろ、それとは逆に、夕

霧と弁少将との政治的対立の構図を準備した上で、早くから一貫して夕霧と弁少将の対峙は仕組まれているのであり、それを透視させるべく、弁少将と柏木の「第一機能」と「第二機能」が付与されていると見るべきである。

柏木の死によって、その「第一機能」は必然的に無化に向かい、物語は弁少将の「第一機能」に焦点を絞ることになる。そこで照らし返されるのは、第一部世界賢木巻での、澪標巻での、そして藤裏葉巻での、柏木不在の意味だったのであり、そして、第三部世界に至って物語上に顕在化する夕霧にとって苛酷な形での弁少将との対立の構図が、既に第一部世界から逃れることのできない呪縛として夕霧に絡みついているという、この物語の構造的枠組みだったのである。

夕霧も弁少将も、源氏物語第一部から第三部までを通して語られる数少ない人物であり、この物語の全体的な枠組みと関わるであろうことは想像に難くない。夕霧と弁少将の関わりのありかたを規定し、物語の構造に参与しているという意味においても、柏木と弁少将の「機能」については重視されねばならないだろう。

注

(1)伊井春樹氏「源氏物語の登場人物と本文異同」(『源氏物語と平安京』おうふう平成6年10月)
氏は「前後の年齢関係からすると、同じ年に生まれた双子ではないかと疑いたくなるほどだが、『八つ九つばかり』とか『五六年のほど』の表現により、かろうじて一年差の年子であったと判断するのが妥当なところであろう」とされる。

(2)三田村雅子氏「源氏物語―物語空間を読む」(ちくま新書平成9年1月)の「Ⅱ光源氏世界の構築」の章、「Ⅲ　他者のまなざし・他者の空間」の章など。
「光源氏世界」という術語について、氏は源氏物語に見られる「天皇中心主義」、「都中心主義」、「光源氏中心主義」の「世」全体を包括する概念として、そこでの光源氏の栄華と権力のありかたを、その生成過程をも含めて説明される際に用いておられる。つまり、光源氏の築き上げた、宮中や都全体にまで及ぶ強大な権力や支配体制と、それを支持し下支えする人々のありかたの総体、とまとめられ、いわば光源氏権力体制を指すと考えられる。本稿においても同様の語義としてこの術語を用いるが、特にこれが光源氏の死後においても有効な概念であることに注意したい。光源氏死後も二世源氏、夕霧や薫が政界で確たる地位を占める以上、確かに「光源氏権力体制」は継承されて残存していると見るべきである。

(3)夕霧が「わが世にあらんかぎりだに、此院(六条院)荒さず、ほとりの大路など、人目離れはつまじう」(匂宮巻二一四頁)と考えていることから、六条院の伝領者は夕霧と思われ、したがって実質上の光源氏後継者として考えるべきであろう。

(4)吉井美弥子氏「弁少将の『歌声』―光源氏と『高砂うたひし君』―」(『日本文学』平成8年5月)

(5)今井久代氏「柏木物語の『身』と『心』―柏木と『家』の中の自己認識」(『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』風間

書房平成13年6月）

（6）伊井春樹氏「紅梅右大臣考」（『源氏物語論考』風間書房昭和56年6月）

（7）別表「柏2 3 4 5 7 8 12 15 17 29 30 31 32 34 35 37 43 48 51 63」など。

（8）光源氏が柏木の人物属性を高く評価する場面。

「柏6」「（光源氏）『公卿といへど、この人（柏木）のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこと多かれ。さる中にもいと静まりたる人なり』」（胡蝶巻四一一頁）

「柏7」「おとゞ（光源氏）の（玉鬘と柏木との結婚の）御ゆるしを見てこそ…」（胡蝶巻四二〇頁）

「柏10」「右の中将（柏木）は、ましてすこし静まりて、心はづかしきけまさりたり」（常夏巻八頁）

「柏12」「三　女三宮事件と弁少将」に資料aとして引用。

「柏27」「一　柏木の機能」に資料として引用。光源氏も「親王たち」と同様の評価を下していることが「も」とあることから知られる。

「柏28」「舞ひはつる程に、権中納言、衛門督（柏木）下りて、入綾をほのかに舞ひて、（中略）又おとらず立ちつゞき給にける、世ゝのおぼえ、有さま、かたち、用意などもおさ〳〵をとらず、官位はやゝ進みてさへこそなど…」（若菜上巻二六三頁）

「柏30」「三　女三宮事件と弁少将」に資料bとして引用。③部分。

「柏33」「（光源氏）『おほきおとゞの、よろづの事にたち並びて勝ち負けの定めし給し中に、鞠なんえをよばずなりにし。はかなきことは伝へあるまじけれど、物の筋は猶こよなかりけり。いと目もをよばず（柏木は）かしこうこそ見えつれ』」（若菜上巻二九九頁）

「柏49」「かの中納言（柏木）の手に似たる手して書きたるか、とまでおぼし寄れど、（中略）かの人（柏木）の心をさへ見落し給つ。」（若菜下巻三八四頁）柏木の手紙について誰かが柏木の筆跡を真似たものだと思うほど光源氏は柏木を信頼していた。

「柏53」「一　柏木の機能」に資料として引用。

「柏54」「一　柏木の機能」に資料として引用。

「柏55」「いとゞしづめてさぶらひたまふさま、などかは（帝の）御子たちの御かたはらにさし並べたらむに、さらにとがあるまじきを、…」（若菜下巻四〇〇頁）

「柏57」「東のおとゞに大将のつくろひ出だし給楽人、舞人の装束のことなど、また〳〵（柏木が）をこなひ加へ給。あるべきかぎりいみじく尽くし給へるに、いとゞくはしき心しらひ添ふも、げにこの道はいと深き人にぞものし給める」（若菜下巻四〇三頁）

（9）引用の源氏物語本文及び頁数は『新日本古典文学大系』本（岩波書店）に拠る。『新大系』本の底本は大島本で、浮舟巻のみ明融本である。

（10）三田村雅子氏「懐妊と算賀の時間」（「源氏物語―物語空間を読む」ちくま新書平成9年1月）

（11）日向一雅氏「柏木物語の方法―光源氏の陰画の物語あるいは宿世の物語の構造―」（『源氏物語の準拠と話型』至文堂平成11年3月）

（12）前掲「弁1」及び「弁4」。後者を引用する。「（光源氏）『中将（夕霧）の声は、弁少将にをさ〳〵劣らざめるは。あやしう有職ども生ひ出づる比ほひにこそあれ。』」（初音巻三九一頁）

（13）引用の催馬楽本文は『日本古典文学全集』本（小学館）に拠る。

なお、底本は鍋島家本であるが、「葦垣」については、本文後半が欠落しているので天治本に拠っている。

「高砂」

高砂の　さいささごの　高砂の　尾上に立てる　白玉　玉椿
玉柳　それもがと　さむ　汝もがと　汝もがと　練緒染緒の
御衣架にせむ　玉柳　何しかも　さ　何しかも　何しかも
心もまたいけむ　百合花の　さ　百合花の　今朝咲いたる
初花に　逢はましものを　さ　百合花の

「梅枝」

梅が枝に　来ゐる鶯や　春かけて　はれ　春かけて　鳴けど
もいまだや　雪は降りつつ　あはれ　そこよしや　雪は降り
つつ

「葦垣」

葦垣真垣　真垣かきわけ　てふ越すと　負ひ越すと　たれ
てふ越すと　誰か　誰か　このことを　親に申よこし申しし
とどろける　この家　この家の　弟嫁　親に申よこしけらし
も　天地の　神も神も　証したべ　我は申よこし申さず　菅
の根の　すがな　すがなきことを　我は聞く　我は聞くかな

(14)『新大系』本脚注
(15)『新潮日本古典集成』本（新潮社）頭注
(16)『源氏物語図典』（小学館平成9年7月）「音楽・舞楽」の項
(17)森一郎氏「源氏物語の『まことや』—源氏物語の語りの表現機構—」（『金蘭国文第2号」平成10年3月）
(18)「春宮には、右大臣殿（夕霧）の並ぶ人なげにてさぶらひ給ば、きしろひにくけれど、さのみ言ひてやは、人にまさらむと思ふ女子を宮仕へに思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、とおぼし立ちて、まいらせたてまつり給ふ。」（「弁34」紅梅巻二三三頁）
(19)「（弁少将）『御前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿宮、内におはすなり。一枝おりてまいれ。知る人ぞ知る』」（「弁38」紅梅巻二三八頁）
(20)『新大系』本脚注
(21)姥澤隆司氏「絶対的優位という閉塞—梅枝・藤裏葉巻における光源氏—」（『帯広大谷短期大学紀要三二」平成6年3月）
(22)(4)に同じ。
(23)森一郎氏「玉鬘物語の構想について」（『源氏物語の方法』桜楓社昭和44年6月）

（なかい・けんいち　本学大学院博士後期課程）

（別表／弁少将・柏木が描かれる場面）

弁少将

	巻	頁	呼称	場所	場面設定
1	賢木	三八四	四の君腹の二郎	二条邸	頭塞の負態
2	澪標	九九	かの高砂うたひし君		左大臣方復権
3	少女	三〇四	少納言	大宮邸	夕霧が雲居雁目当てに邸へ
4	初音	三九〇	内の大殿の君たち 弁少将	六条院	正月男踏歌
5	胡蝶	四〇七	内の大殿の君たち	六条院	季の御読経 玉鬘に懸想
6	常夏	五	弁少将	六条院	近江君の話題
7	常夏	一三	少将	内大臣邸	光源氏の皮肉等を父に報告
8	常夏	一五	少将	内大臣邸	昼寝の雲居雁
9	篝火	三一	弁少将	六条院	鈴虫に紛う歌声
10	行幸	八〇	弁の君 弁	六条院	光源氏批判
11	行幸	八三	少将	内大臣邸	近江君を愚弄
12	真木	一三四	内の大殿の君達	髭黒邸	男踏歌に参加か
13	梅枝	一五七	弁の少将	六条院	明石姫君裳着前夜梅枝歌唱
14	藤裏	一八二	弁少将	内大臣邸	喜垣歌唱
15	藤裏	一九八	弁の少将	六条院	六条院行幸

柏木

	巻	頁	呼称	場所	場面設定
1	少女	三〇四	左少将	大宮邸	夕霧が雲居雁目当てに邸へ
2	初音	三九〇	内の大殿の君たち	六条院	正月男踏歌
3	胡蝶	四〇三	内の大殿の中将	六条院	玉鬘に懸想
4	胡蝶	四〇七	内の大殿の君たち	六条院	季の御読経 玉鬘に懸想
5	胡蝶	四〇九		六条院	玉鬘へ文
6	胡蝶	四一一	内の大殿の中将	六条院	光源氏が人柄を賞賛
7	胡蝶	四二〇	岩漏る中将	六条院か	玉鬘を恋慕
8	螢	四四三	右中将	六条院	夕霧に取次を依頼
9	常夏	五	中将の朝臣	六条院	話題には上るが同座せず
10	常夏	八	右の中将	六条院	光源氏が人柄を賞賛
11	常夏	一八	中将	内大臣邸	近江君引取を内大臣が批判
12	篝火	三一	頭中将 中将	六条院	和琴演奏
13	行幸	八〇	中将	六条院	光源氏批判か
14	行幸	八二―八三	中将	内大臣邸	近江君を愚弄
15	藤袴	九九	頭の中将	六条院	玉鬘への愁訴と自制
16	藤袴	一〇一	中将		髭黒が玉鬘への取次を依頼
17	真木	一四五	頭中将	内大臣邸	玉鬘の皇子出産を希望
18	梅枝	一五七	頭中将	六条院	明石姫君裳着前夜和琴演奏
19	梅枝	一六二	内の大殿の頭中将	六条院	光源氏が草子執筆を依頼
20	藤裏	一七八	頭中将	六条院	夕霧を藤花宴に招待
21	藤裏	一八二	頭中将 中将	内大臣邸	夕霧を雲居雁の部屋へ導く
22	藤裏	一八四	中将	内大臣邸	夕霧の使者を饗応
23	藤裏	一八八	頭中将		賀茂祭の勅使

| | | |

| | | |

81	横笛	六〇			
82	横笛	六四	かの衛門督	夕霧三条邸	夕霧が夢を回想する
83	鈴虫	七七～七八	故権大納言	六条院	光源氏の言
84	夕霧	九九	故君	小野	夕霧の言
85	夕霧	一〇四	故大納言	小野	一条御息所の言
86	夕霧	一一〇	故督の君	小野	一条御息所の心中
87	夕霧	一二五	故衛門の督	夕霧三条邸	夕霧が追慕
88	夕霧	一三〇	大納言	一条宮	夕霧の心中
89	夕霧	一五〇	故君	一条宮	落葉宮の心中
90	紅梅	二三二	右衛門督		按察大納言の兄として紹介
91	竹河	二六一	故大納言	玉鬘邸	玉鬘の言
92	橋姫	三一九	右衛門の督	八宮邸	女房弁の言
93	橋姫	三三二	故権大納言の君	八宮邸	女房弁の言
94	椎本	三六三	かの大納言	八宮邸	薫の心中か
95	宿木	八九	故権大納言の君	八宮邸	薫の心中か
96	宿木	一〇六		宮中	藤花宴 薫が笛を演奏

30	鈴虫	七八	左大弁	冷泉院	宮中の宴中止で冷泉に参上
31	夕霧	九〇	近きゆかりの君たち 弁の君	一条宮	落葉宮を訪問しなくなっている
32	夕霧	一三四	君達	小野	一条御息所の法事を行う
33	幻	二〇六	上達部たちなど	六条院	仏名会に参加したか
34	紅梅	二三二～二三三	按察大納言 故致仕のおとゞの次郎	按察使大納言邸	現状の紹介
35	紅梅	二三四		按察使大納言邸	大君を参内させる
36	紅梅	二三五～二三六		按察使大納言邸	宮の御方への関心
37	紅梅	二三六～二三七		按察使大納言邸	音楽談義 光源氏追想
38	紅梅	二三八		按察使大納言邸	匂宮に和歌 光源氏追想
39	紅梅	二四一		按察使大納言邸	匂宮と和歌の贈答
40	竹河	二五六	かむの君の御はらからの大納言	玉鬘邸	年始挨拶に参上
41	竹河	二七四	大納言	玉鬘邸	玉鬘の心中か
42	竹河	二八八	藤大納言		左大将兼右大臣に昇進
43	竹河	二九〇	大臣殿	玉鬘邸か	右大臣邸は玉鬘邸に隣接
44	竹河	二九一	このおとゞ	玉鬘邸	玉鬘の言
45	橋姫	三一九	藤大納言	八宮邸	女房弁の言
46	椎本	三四五	藤大納言	八宮邸	勅命で匂宮を迎えに参上
47	宿木	三四	かの按察使の大納言		宮の御方の父匂宮の心中か
48	宿木	一〇五	按察使の大納言	宮中	藤花宴
49	宿木	一〇七	按察使大納言 腹立つ大納言	宮中	薫への女二宮降嫁に憤慨 薫の歌に声を合わせる
50	宿木	一〇八	腹立つ大納言 按察使	宮中	